

# 聴覚障がい者の私の思い

岩崎 心菜

西条市立西条東中学校 二年

私は、聴覚障がい者で人工内耳と補聴器という器具を付けています。

私は、人工内耳を付けていなかったら何も聞こえません。音のない世界に入っているみたいです。逆に、人工内耳や補聴器を付けるとよく聞こえ、いろいろな音があるのに気がついて、おもしろいです。でも、人工内耳や補聴器をつけると目立つので、知らない人からじろじろ見られて辛いこともあります。また、私たち聴覚障がい者が耳に器具を付けると、何でも聞こえると思っっている人もいます。でも、それは違います。器具を付けていても何でも聞き取れるわけではありません。

例えば、何か言われた時に聞き取れないことがあります。そういう時は、「え？」とか「もう一回言って。」とかと言って聞き返します。もちろん相手の人は、私に口の動きを見せながら話し、私に伝えようとしてくれます。しかし、何度言っても聞き取れない時は「なんでもない。」と

言われてしまいます。内容を知らないので頑張って聞き取ろうとしているので、わからないままになってしまったり困るし、いやな気持ちにもなります。そういう経験を何回かしたら、言われたことがわからなくても、「うんうん」と相槌を打ち、わかったふりをしてしまいます。わからなくても聞き返さなくなります。なぜかというところ、「何でもない。」と言われたくないからです。

聴覚障がい者の中には、健聴者と一緒の幼稚園、小学校、中学校、高校に通う人もいれば、聾学校に通う人もいます。普通に話せる人もいれば、話せるけど聞き取りにくい人、手話で話す人もいます。私は今、健聴者と一緒の学校に通っていて、普通に話せるけど聞き取りにくいので、話を聞く時に話す人の顔と口を見ながら聞いていますが、その時に困ることがあります。それは話す人が早口の時です。早口だと言葉が聞き取りにくいし、口の動きも早すぎて何を言っているかわからないのです。

私は健聴者のみんながうらやましいです。友達と普通に話せるところや会話の中に入れるところがうらやましいです。友達は、有名な歌手の歌や流行っている歌を知っているけど、私は全然わかりません。私だつて普通に友達と会話したいし、会話の中にも入りたいです。お店に行つてもじろじろ見られないし、顔の見えない相手と電話もできてうらやましいです。

しかし、障がいをもっているからと言つて何もできないというわけではありません。何かの障がいをもっているから何もできないと思つている人がいるとしたらそれは間違いです。障がいをもつていてもできることはたくさんあります。私も自分にできることは精一杯頑張ることにしています。勉強も、聞こえにくさに負けたくないので、授業の内容がわかるように予習や復習を頑張つています。部活動も、顧問の先生や審判の人にタツチスクリーンマイクをすることをお願いして、その他でわからないことは仲間の部員に助けてもらいながら活動しています。また、長距離走が得意なので、駅伝の練習にも参加しています。タイムや声掛けの音が聞こえなくて困ることもあるけど、それを伝えると周りの人が支援してくれます。毎朝の練習も大変だけど、どこまでできるか自分の限界に挑戦したいと思つています。

障がいがあつても、できることを見つけて何かをしよう

とすることはできません。どんな障がいをもつてもみんな同じ人間です。健常者の人と障がいがある人とがきちんと向き合つて話すことで解決できることはたくさんあると思います。お互いのことを知ること、障がいがあるとかないとか関係なく仲良く生きていけるといいと思います。

熊本市立出水中学校 二年

## 心の成長

清塘 麻央

私には、知的障害のある兄がいる。兄は、とてもこだわりが強く、思い通りにいかないと大声を出して怒るため、家族はふり回されている。また、話すことができないため、意思がよみとりにくい。夜は家中の電気を消して回るし、人の食べ物でも平気で奪い取る。そんな兄の行動に小学生になった頃の私は、強い違和感を感じ、次第に嫌悪感を覚えるようになった。そして、兄の存在をはずかしいと思い、兄とは関わらないようになんとなく避けていた。

私と兄は六歳差で、兄が中学生になる年に私は小学校に入学した。入学してすぐに兄の一学年下の六年生たちから、

「M君の妹でしょう？いいなあ。」  
などと声をかけられた。また、兄の担任だった先生は、会うたびに、

「M君元気？」

と声をかけてくれた。私はてっきり、兄は小学校でも嫌が

られる存在だったのだろうと思っていたが、とてもかわいがられて人気者だったことを知って驚いた。なぜだろうと考えても当時は全く分からなかった。

私を通った小学校は、隣接する熊本支援学校と創立以来四十年交流を続けている。四年生のときは毎週昼休みに支援学校を訪問し、障害のある子どもたちと遊具で遊んだり、ゲームをしたりして過ごした。支援学校には兄のような知的障害の子や、手足が不自由な子など様々な障害をもつ子がいるので、初めはどう接すればいいのか分からず戸惑っていたが、遊びを通して相手の性格を知ったり、不自由な体で懸命に頑張る姿を見たりするにつれ、交流が楽しみになり、心が通い合うようになった。障害のある子のお世話をする気持ちだったのが、普通の友達に会いに行く気持ちへと変化した。この交流を通して、相手を深く知ると、障害者に対する違和感がなくなり、相手の健常者と違うところを見るのではなく、違いを受け止め、良い所を

たくさん見つけられるようになった。私が一年生だったときの六年生がみんな兄のことを好きでいてくれたのは、支援学校での交流を通して障害者への偏見や差別の意識がなくなっていて、兄の良い面を知ってくれたからかもしれないと思う。そして、兄に偏見をもち、その存在をはずかしいと思っていた自分がはずかしくなった。

兄には、素直で優しいところや一つのこと集中できるなどの良いところがある。相変わらず嫌なこと、大変なことも多いが、兄は障害者になりたくてなっただけではないし、不自由を抱えながら懸命に生きているので、すごいと思う。最近は機嫌がいいときを見計らってちょこちょこして笑わせたり、簡単なダンスを教えたりして遊べるようになった。兄も嬉しそうに笑ってくれるので、私も嬉しくなる。しゃべれなくても心を通わせることはできる。兄が困っているときは手助けをして、自分で壁を乗り越えようとしているときには、逆にあまり手を貸さず、本人が充実した生活を送れるようにほどよく介助することが自分の役目だと思えるようになった。

兄との生活や支援学校での交流を通して、私は障害者に対する見方を変えることができ、少し心が成長できたのではないかと思う。兄のような障害者が生きやすい社会を実現するためには、健常者と障害者が交流する機会を増やし、お互いを知り、違いを認めることが最も大切なことだ

と思うが、たとえそのような機会がなかったとしても、全ての人が障害の有無に関係なく、自分とは違う相手のありのままを尊重していくことで、心を成長させられるはずだ。そして、その「心の成長」こそが全ての人が生きやすい、偏見や差別のない社会の実現につながっていくと私は信じている。

相模原市立大沢中学校 一年

## 心を守る、皆で支える

志田 識乃

曾祖母の名前は、「すみちゃん」。赤ちゃんのような満面の笑みをする、とても可愛い人です。ただ、認知症だから、すみちゃんの娘である祖母のことも、孫である母のことも、わかっていないことが大半です。説明してもすぐに忘れてしまいます。出かける時は、興味を持った方向へふらつと行ってしまいうので、手をつながないといけません。でも、手をつなぐと、すみちゃんは嬉しそうです。

すみちゃんは、私はまだ幼い頃、農作業を頑張っていました。ひざをさすってはいましたが、記憶も体も元気でいました。少しずつ部屋の片付けが苦手になり、少しずつ思い出せない事が増えてしまいましたが、以前は、とてもしっかりしていたのです。

障害にも色々あります。生まれつきのもの、事故で急になってしまったもの、病気で徐々に症状が強くなってしまったもの……。御本人にとっては、どれも受け入れ難いでしょう。すみちゃんが、いったいどんな気持ちで毎日を過ごして

てきたのか、年に数回会うだけの私には、想像しか出来ません。

すみちゃんは、何回も同じ事を質問します。特に多いのは、

「おみやあ、誰だ。」

正直、悲しい気持ちが生れます。しかし、これはすみちゃんの責任ではありません。すみちゃんの周りにいる人たちは、何回でも、同じ内容を笑顔で答えます。

「そうかえ、そうかえ。」

と、すみちゃんは笑います。すみちゃんは、手の力が弱い時があるので、お茶をこぼしてしまいます。けれど、誰も怒りません。皆ですみちゃんの心を守っているようです。優しい気持ちで接し続けるのは、凄いと思います。

祖母の兄夫婦と暮らしながら、週二回デイサービスに通うすみちゃん。祖母の兄夫婦は会社経営をしている為、まだ仕事があり、毎日忙しくしています。近くで暮らす、祖

母の姉、弟、祖母、それぞれの家族が、すみちゃんの暮ら  
しに関わっています。皆、とても仲良しです。それでも、  
自分のやりたいこと、やらなければいけないことがある中  
で、皆ですみちゃんを気にかけている――。本当に素敵  
なつながりで、これって愛なのかなと、感じます。

去年の夏、すみちゃん、祖父、母と私の五人で、農業  
祭に行きました。すみちゃんと手をつないで、ゆっくり歩  
く駐車場までの百メートル程の道のりが、いつもと違う景  
色に見えました。

「段差あるから、気をつけてね。」

「信号だから、止まろう。」

声をかける度に、すみちゃんは、笑顔で私を見ました。

今年の春夏は、コロナウイルスの影響を考えて、他県で  
暮らす私と母は、すみちゃんに会いには行けませんでし  
た。会えても、私を覚えてはいないだろうけど、手紙を書  
いても何のことかわからないかもしれないけれど、せめて  
もの思いで絵手紙とお菓子を送りました。描いたのは、す  
みちゃんと家族の笑顔。選んだお菓子は、すみちゃんの好  
きな最中。一瞬でも、すみちゃんの笑顔の時間が増えま  
すように。すみちゃんと暮らす家族に、感謝の気持ちがあ  
りますように。

「うみやあ、うみやあ。」

最中を頬張るすみちゃんの姿を思い浮かべると、私も笑顔

になっていました。

すみちゃんや家族を見ると、福祉とは特別な事柄で  
はなく、日常にある心の優しさなのではないかと思いま  
す。誰かの優しさを感じた人が、他の人に優しくし、その  
優しくされた人も別の人に優しくする。もしくは優しく仕  
返す。そんな風に、優しさに満ちていたら、私たちの暮  
らしはもっと心豊かになるでしょう。